2026_1106「ビルのすき間の武甲山」日々の理科 4471 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

東京は「望岳都」とも呼ばれます。西側から北側にかけて、富士山をはじめ、丹沢、奥多摩、秩父、上州などの山々を望むことができるからです。地上からは建物に遮られて、遠くの山並みを見ることは難しくなりましたが、少し高い建物に上るだけで、驚くほど多くの山々が姿を現します。空気の澄んだ冬の日などには、都心からでも百キロ以上離れた山々を見渡すことができます。

北区にある建物の７階から西の方角を眺めていると、ビルのすき間に、ひときわ特徴的な山容の山が見えました。頂上付近が平らで、向かって右側が不自然なほど急傾斜になっています。これは埼玉県秩父市と横瀬町にまたがる、標高１３０４メートルの「武甲山（ぶこうざん）」です。秩父地方を代表する名峰ですが、その独特な姿には、人間の産業活動が深く関係しています。

武甲山は良質な石灰岩の山として知られ、古くからセメントの原料となる石灰石が採掘されてきました。特に大規模な露天掘りによって山頂付近から石灰岩が削り取られ、かつての自然な山容は大きく変化しました。写真に見える急斜面も、その採掘活動によって形成されたものです。現在も採掘が続けられていますが、山の姿は、産業の発展と自然環境との関係を物語っているように思えます。

遠く離れた東京のビルのすき間からも、その変貌ぶりをはっきりと確認できる武甲山。北区田端からの直線距離は約 64km。都市の風景の向こうに見える一つの山が、私たちの暮らしと大地との深いつながりを静かに教えてくれています。（2026 年 11 月上旬／東京都北区田端）

